



Musée de la Révolution française, Grenoble

フランス文学研究室 NEWS

令和3年5月1日第9号

この号の内容

1. イベント報告
2. 在学生数
3. 修了生進路
4. 学部生の声
5. 日仏会館フランス語コンクール
6. オンライン留学
7. 日本とアフリカ
8. おまけ
9. 編集後記

イベント報告

2020年12月4日

Méké MEITÉ 氏 (フェリックス・ウフェ=ボワニ大学) 講演会

『「サンングイア (le sanangouya)」とは何か 西アフリカ (マンデ語族) に伝わる紛争の防止と解決のメカニズムについて』

※黒岩卓先生オーガナイズにより上智大学との共同開催

在学生数

学部生：12名

博士前期課程：6名

博士後期課程：5名

研究生他：5名

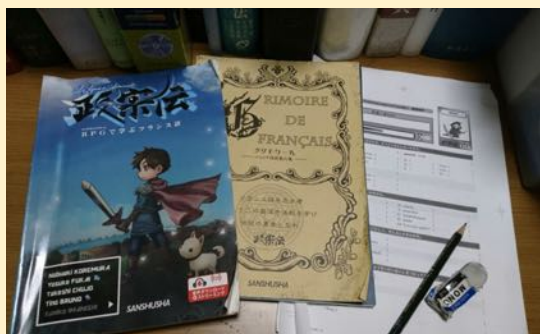
修了生進路

学部生：カチタス、ベネッセスタイルケア、大学院文学研究科 MC 進学 (計3名)

修士/博士学生・その他：神戸大学専任講師, Amazon, 西日本鉄道国際物流事業本部, 大学院文学研究科 DC 進学 (計4名)

学部生の声

希望に満ちた大学一年生のキャンパスライフは、感染症流行のために儂くもついでてしまった。対面で学ぶことができず、サークル活動も満足にできなかった一年ではあるが、フランス語学習をモチベーションに困難な状況を乗り越えた文学部の一人の学生にエッセイの執筆を依頼した。



佐藤さんの教科書。使い込まれた様子が伝わってくる。

「言葉の海へ」

鳥の物憂げな声が小さなアパートの一室に最初の授業日の訪れを知らせた。基礎フランス語を担当する深井先生が指定された教科書は、その名も「政宗伝」。第一ページ目のあらすじ紹介に目を通すやいなや、私はすっかりこの教科書に魅了されてしまった。近未来のフランスを舞台に、世界統一をもくろむ悪の組織 WANO と主人公・政宗（どうも東北大生らしい）たちの間の壮絶な闘いが繰り広げられる。未曾有の危機の時代に学生時代を迎えた私にとってこの物語は決して他人事ではないように思われた。我々は政宗たちと一緒に数々のミッションを乗り越え、フランス語を身体に染みこませていく。中でも印象に残ったミッションは、動詞の活用をリズムに合わせて唱えるというものだ。フランス語学習者を悩ませるとされる動詞の活用も、リズムに合わせて呪文のようにして唱えれば難なく頭に染みこんでいくのだから妙である。個性的な登場人物たちもまたこの教科書に彩りを添えている。中でも私が気に入っているのは、サラという名前のヒロインである。4歳のときに不法移民としてやってきた親から引き離され、ベルギーで育てられたという暗い過去を背後に控えながらも、持ち前の知性と忍耐力で仲間たちを支える彼女は、「政宗伝」に咲いた名花であろう。物語を締めくくる「希望の歌」の切なくも美しいメロディーも私の心の中で響き続けている。「政宗伝」はフランス語という豊饒の海へと私を誘い、そして残酷な現実を乗り越える力となった。深井先生、そしてこの教科書を編んだすべての先生方にこの場を借りて感謝の意を表したい。(文学部2年 佐藤勇人)

特集 日仏会館フランス語コンクール

日仏会館主催フランス語コンクールは2020年で第13回を数え、学生から大人まで多くのフランス語学習者が参加するフランス語スピーチコンテストである。今大会、東北大学からは二人の学部生が参加し見事受賞することができた。コロナ禍での参加の経緯やコンクールを通じて得た成長など思いの丈を語ってもらった。

※右写真は日仏会館 HP より



「日本に広がる世界」

新型コロナウイルスにより、これまでの大学生活は一変した。準備を進めていたフランス留学も中止となり、気落ちしていた時、入学時からお世話になっている深井先生から弁論大会の存在を教えていただいた。「日本にしながらできることをやろう」と気持ちを切り替え、参加を決意した。

1次審査の結果発表があつてからは約1か月の短い準備期間で、原稿の暗唱と、質疑応答に対応するための瞬発力を鍛えた。昼夜問わずオンラインで、熱心にご指導して下さった深井先生とベルトラン先生には本当に感謝している。また、大会に向けて同じく切磋琢磨する仲間も大きな支えとなり、励まし合いながら当日までの練習を乗り切ることができた。

この大会を通して、高校生ながらも堂々と発表する姿や、主婦になっても不断の努力で大会に応募する方などフランス語という共通点を持つ様々な方と出会い、大きな刺激を受けた。また、フランス語で自分の意見を堂々と発表し、審査員の方と質問を通してコミュニケーションできるようになり、自分自身の成長に自分が一番驚いた。3年生まで語学を続けた努力が結実し、より高みを目指してさらなる成長への意欲がわいた。今回の発表を今後のバネにしてさらなる飛躍を誓いたい。



鈴木さんの受賞の様子。

大会ではインドのスラム街でのボランティア経験をもとに、貧困や格差への問題提起を行った。生まれてくる場所は選べないにも関わらず、スラムに住む子供たちが貧困によって将来の選択肢が狭められてしまっている現実と、自分自身がこれまで日本で生活してきた恵まれた環境との差に衝撃を受けたためだ。私たちは労働力や資源を共有し、互いに支え合って生きている。環境によって制約を受けず、誰もが個性を発揮して輝くことができる社会を構築することの重要性を論じた。

コロナウイルスは昨春にも増して猛威をふるっているが、何かをできない言い訳にするのではなく、新たに挑戦するきっかけとして気持ちを切り替え、今後も前向きな気持ちで努力を続けたいと思う。(経済学部4年 鈴木綾)

「やってよかった」

去年の夏にフランスへ留学をする予定であったが、コロナウイルスの感染拡大の影響でついでた。入念な準備も水の泡となり、大きな喪失感に襲われた。しかしいつまでも沈んだ気持ちのまま、フランス語の学習を疎かにするわけにもいかなないので、新しい目標を探すことにした。それが今回の弁論大会である。

発表は英語教育について論じた。テーマ選択の主な理由は二つで、将来英語教育を担うのが私の夢であることと、フランス語のスピーチ大会で英語について話す奇抜さを質疑でもっばら問うてくれることになれば、応答についても対策しやすく、時間稼ぎになると考えたからである(しかし実際はそのような質問はなかった)。具体的には、大学で参加したフランス語による映画プロジェクトの経験から、語学には「楽しさ」や「創造力の涵養」といった付加価値が必要であると考え、高校生が演劇や映画などの創作活動を英語を使って体験する「アトリエ」のようなものを作りたいと述べた。

原稿の準備から発表練習まで様々な行程があつたが、一番参ったのは発音練習であつた。英語の発音やイントネーションの癖が抜けないと何度も指摘を受けた。少しの改善は見られたが、大会で通用するまでには至らないのではと、大会までの日々は不安で仕方なかった。

しかし、ただ辛かった訳ではなく、今後のフランス語上達に必要な要素をいくらか掴めた気もする。たとえば、隠れアンシェヌマンというものを教えていただいた。"une entreprise"をなめらかに言おうとすれば、発音の上ではuneのeを消して、uneとentreを「ユノントル」と読んででも差し支えない。これを意識的に実践することにより、フランス語を読むのが楽になった自覚がある。大会を通して、大きな財産が得られたと思う。また、指導して下さった先生がよくおっしゃる台詞で、大切なことほど面倒くさい、がつくづく実感された。これほど面倒で困難なことでも私は乗り越えることができたと思う。これを励みにして、今後も学習への努力を惜しまないつもりである。(文学部4年 黒井駿)



スピーチ大会後に恵比寿のカフェで卵付きトーストを頼む黒井さん。

特集 オンライン留学

東北大学からフランスへ

私は2019年8月から2020年5月までリヨン第2大学で交換留学をしていました。「5月まで」と述べましたが、実は新型コロナウイルスの影響で3月末に帰国し、4・5月は日本でオンライン授業を受けていました。

私がオンラインで受けたのは「リヨンの歴史」という留学生用の授業で、「Moodle」というツールを使いました。この授業は各回に担当の学生がプレゼンをするという内容で、私の発表テーマは「Libération de Lyon」でした。発表の時は聞き手の人たちの反応が見えませんが、質疑応答を通じて聞き手も内容をしっかり理解していたことがよくわかり、自分の伝えなかったことは十分に伝わっていたようでした。オンラインだと自分のパソコンだけを見ているので対面よりも発表に集中し、変に緊張しないためかと思いました。

最後にオンライン留学のメリットとデメリットをまとめたいと思います。メリットとしては「気軽に現地の授業が受けられる」ことだと思います。その結果、現地に行く金銭的・時間的コストを省くことができます。デメリットは「生のフランス語に触れる機会が少ないこと」「文化を直接的に学べないこと」です。リヨン滞在中には、授業よりもむしろ友達とカフェや美術館に出かけたりすることでフランス語が上達し、文化も学べたと思っています。今後オンラインによる留学や海外の大学の授業を受ける機会が増えていくと予想できますが、自ら積極的に現地の学生とコンタクトを取ることなどでそのデメリットを補えば、より充実した海外経験になるのではないかと思います。（文学部4年 小松浩太郎）

昨今の感染症流行により各人の思い描いていた留学生活は変更を余儀なくされた。そのような中で「オンライン留学」という新たな留学方法が国内外の大学で模索された。その実施方法や利点、苦悩について、日本人学生とフランス人学生二人に話を伺った。

フランスから東北大学へ

こんにちは。私の名前は Ewann Lotz です。フランスのグルノーブルアルプ大学で、応用言語学部英語日本語学科と経済学部のダブルディグリープログラムを専攻しています。2020年度は留学生として東北大学で学ぶことを決めました。というのも、東北大学は非常に評価されている大学であると同時に、興味深い授業があったためです。具体的には、日本人学生と共に学ぶコミュニケーションの授業や、日本企業がどのように機能しているのかを学ぶ授業などが挙げられます。ただ残念なことに、現在の世界的感染症流行により、この度の交換留学は私の願っていた形で実現することはありませんでした。どれだけ勉学に励もうと日本に行くことが叶わないと思うのは時に辛く、モチベーションを保ち続けるのも困難でした。そのような中でも他の人たちとの交流を図るため、東北大学の交換留学プログラムによって企画された活動に参加することを決意しました。例えば、「グローバルカフェ」という活動に参加し、日本人がフランス語を学習する手助けを行ったりしました。ただ、時差が原因で苦労しました。というのも東北大学の授業はフランス時間の午前1時から10時の間で行われていたためです。授業の時間割がより柔軟になることで私のような境遇にある学生のオンライン留学がより容易になるのではないかと思います。他方で、家族と一緒にいることができたり、現地に行かなくても興味深い授業を受講することができるなどオンライン留学にはいくつかのメリットもあります。

日本語の能力をより高めるため、また仙台の街と仙台での生活を経験できるよう、いつの日か日本を訪れたいと願っています。今後はオンラインを活用した授業や留学が増えていくと思いますが、現地学生などとコンタクトを取ること、さまざまなオンラインの活動に参加すること、積極的に他人に関わることなどを通じ、授業へのモチベーションを保ちつつ心の健康を維持することが大切なのではないかと思います。（グルノーブルアルプ大学 Ewann Lotz）

特集 日本とアフリカ

アフリカ大陸における今後のフランス語話者増加は多くの国際機関から指摘されている。たとえばフランコフォニー国際機関によると、2050年には世界のフランス語話者は7億人を超え、その85%はフランス語圏アフリカで占められると予測されている。同時にアフリカのフランス語はフランスのフランス語とは異なる特徴を持ち、言語学的な注目も集めている。本号では、フランス語を公用語とするブルキナファソから2016年に来日し、東北大学で研究に従事するアラン・イアンさんに「日本とアフリカ」についてインタビューを行った。

— まずアランさんはどのような研究を行なっているのですか。

私はブルキナファソのフランス語と現地語の統語や言語学習・獲得について研究をしています。最終的な目標は国際社会における西アフリカの言語状況の理解を促進し、アフリカ諸国の発展のために新たな言語政策を提案することです。来日当初は日仏英対照研究をしようとしていたのですが、東北大のある先生から「なぜ自分の話す現地語を研究しないのか？」と投げかけられました。確かに、ブルキナファソの教育機

関は全てフランス語で運営されており、70もある現地語は研究対象にすらなっていません。フランス語を研究することはある種自明だと思っていましたが、その先生の一言で現地語を研究し現地語の発展の道を拓いても良いのではないかと認識の転換が起きました。

― なるほど、その先生の一言がその後の研究方針を決めるきっかけとなったのですね。2016年から日本におられるとのことですが、仙台や東北大学とフランス語圏アフリカにはどのような繋がりがあられるのでしょうか？

現時点で仙台や東北大学とフランス語圏アフリカのオフィシャルな繋がりはないと思います。ただ個人レベルの繋がりは存在しています。以前仙台で開いた料理イベントではブルキナファソ人と日本人が互いの国の料理を作り紹介しあいました。また、ブルキナファソ人が日本への留学を行えるよう Facebook でグループを作成し情報提供も行なっています。さらに東北大学の黒岩卓先生はこれまで二度コートジボワールを訪れ、現地の大学や研究者と共同で講演会などを企画しています。アフリカ全体に視点を広げてみると、仙台には宮城アフリカ協会 (AFAM) があり、宮城県民とアフリカ出身者の交流機会を提供しています。

― では今後仙台や東北大学がアフリカの国々により繋がりを持つためには何をすれば良いのでしょうか？

私は第一のステップとして大学や研究者が大きな役割を果たすと思います。黒岩先生の企画したコートジボワール・フランス語についての講演会では活発な意見交換が行われました。また、言語学習も非常に大切です。残念ながら私の母国では日本語を学びたくても機会がなく、日本でもアフリカの言語を学べません。しかし大学間の交流があればこの現状は変わっていくと思います。また文化交流イベントを開き相互理解を深めることも重要です。

― アランさんは今後日本とアフリカの関係はどうかと思いますか？

まず答えは科学的根拠に根ざしたものではなく、むしろ私の確信に基づいていることをお断りしておきます。その上で日本・アフリカ関係の発展は日本側の態度に依拠する部分が大きいのだと思います。アフリカには資源が多く眠っており、今後急速な発展を遂げることが予測されています。中国はリスクを冒して直接的な投資・開発を行い、関係構築に専念しています。一方日本はアフリカの資源を他国経由で輸入するなど未だ間接的な関係にとどまっており、このままでは中国ほどの影響力を持つことはできません。アフリカの重要性に気づいているならば、日本はより直接的な結びつきを探し求める必要があるでしょう。

― では最後にアフリカのフランス語についてお話を聞かせてください。

アフリカのフランス語は非常に特徴的です。コートジボワールのフランス語は *nouchi*、カメルーンでは英語とフランス語と現地語をミックスした *camfranglais* と呼ばれ、その国独自の発展を遂げています。文の構造についてはフランスのフランス語とほぼ同じですが語彙や語義の面で非常に異なっており、現地に住んでいなければフランス人でさえその意味を理解することは不可能です。例えば *avoir le deuxième bureau* は文字通りには「第二のオフィスを持つ」という意味ですが、ブルキナファソでは *avoir une maîtresse* 「妾・彼女を持つ」と理解されます。また *il a grand gueule* では「彼は大きな口を持っている」が原義ですが、*il parle beaucoup* 「彼はたくさん話す」と理解されます。このように単語の一つ一つを理解できても、それがフランスのフランス語とは異なった意味で使われるので、フランス人でさえ文の意味がわからないことがあるのです。これがアフリカのフランス語の特徴だといえます。

おまけ

震災から 10 年という節目の年の 2 月、私たちは再び大きな地震に見舞われた。学生・教員とも無事だったが、研究室は大きなダメージを受けた。学生・教員総出で片付けにあたり、現在は通常通り研究室を使用することが可能となった。片付け後、阿部先生の足は「(遮光器付き) 土偶」のようになり数日動けなかったそうだ。



編集後記

原稿を執筆いただいた全ての皆様に厚く御礼申し上げます。非常に困難な一年だったにもかかわらず、目標や希望を見出して勉学や研究に励む姿に編集者の私も勇気づけられました。

本号では「フランス語コンクール」、「オンライン留学」、「日本とアフリカ」という 3 つの特集を組みました。どれも新鮮な内容になっていると思います。ぜひお楽しみください。

(文学研究科修士 1 年 武田秀祐)

フランス文学研究室ホームページ

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

講演会やシンポジウム、学生の活躍など多くの情報を随時更新中です。

是非覗いてみて下さい。

「フランス文学研究室 NEWS」に関するご意見・ご要望は、以下の宛先までお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973 (研究室)

Email : shu100322@gmail.com (編集者アドレス)